

ニューカマー青年の移行に関する研究 —在日ブラジル人青年の「自立」をめぐる物語を手がかりに—

児島 明*

A Study of the Career Choices of Brazilian Young People in Japan

KOJIMA Akira

キーワード：ニューカマー，在日ブラジル人，青年期，移行，自立

Key Words：newcomer, Brazilians in Japan, adolescence, transition, independence

I. 課題の設定

本稿は、ニューカマー青年の移行経験に注目することにより、移行の視点を欠いてきたニューカマー研究とニューカマー青年を対象に含めずに展開されてきた移行研究の双方を問い直すと同時に、移行経験をニューカマー青年の視点から理解することの意義について論じることを目的とする。具体的には、国境を越えた移動のなかで青年期を過ごす在日ブラジル人青年の移行経験について、かれらが自身の「自立」や「自己実現」をどのように意味づけ、生きているのかに注目する。

1990年の改正入管法の施行からすでに20年が経過した現在、外国人登録者数は200万人を突破し（法務省入国管理局の公式発表によれば、2008年末現在の外国人登録者数は221万7,426人、総人口の1.74%である）、外国人児童生徒が在籍する学校数および在籍する児童生徒のうち「日本語指導が必要な外国人児童生徒」も増加する一方である（文部科学省の公式発表によれば、2008年9月現在、公立小・中・高等学校、中等教育学校および特別支援学校に在籍する日本語指導が必要な外国人児童生徒数は28,575人、在籍学校数は6,212校である）。

こうした現状を背景に、ニューカマーの教育に関する研究も確実に蓄積されてきた。扱われる領域も多岐にわたるようになってきており、学校への適応に関するもの（太田 2000, 志水・清水編 2001, 小内編 2003, 児島 2006, 清水 2006, 森田 2007）、不登校・不就学に焦点を絞ったもの（宮島・太田編 2005, 佐久間 2006）、高校進学・高校生活に関するもの（山崎 2005, 広崎 2007, 志水編 2008）など、ますますその裾野を広げてきている。

他方、グローバリゼーションにともなう社会の構造的変化の影響を受けて、青年期から成人期への移行の遅延や不明確化に研究者の目が向けられるようになってきた（本田 2004, 小杉 2003, 宮本 2002, 太郎丸編 2006, 山田 2004他多数）。すなわち、1990年代後半以降、将来展望を従来のように抱けなくなった若者の困難の背景を、多くの論者が学校と職業との円滑な接続の破綻として描き、「教育から仕事への移行」の形式を再編成することの必要性を訴えているのである。

ニューカマーの教育研究の裾野の広がりだが、日本社会で成長しゆくニューカマー青年の存在を反

*鳥取大学地域学部地域教育学科

映するものであることを鑑みれば、それが上記の移行研究の視点を取り入れてもおかしくないはずであるし、逆に、移行研究においてニューカマー青年が考察の対象とされてもよいはずである。しかし残念なことに、ともにグローバル化が進行する現代社会における若者の育ちを対象としているにもかかわらず、両者は互いに接点をもたぬままに、それぞれ別々の展開を見せてきたように思われる。

これは一方では、ニューカマー青年に関する議論が、教育か労働かに二分されたうえで、前者は教育関連の諸学問の担当、後者は労働関連の諸学問の担当という暗黙裡の役割分担がなされてきたからではないだろうか。そして、そのような役割分担に対応した対象のカテゴリー化——すなわち、学校における「児童・生徒」もしくは労働市場における「外国人労働者」——が行なわれ、それらのカテゴリーに即応するかぎりでの考察がなされてきたために、ニューカマー青年の経験を移行のプロセスとして包括的に理解することが困難になってきたものと思われる。

他方、多くの移行研究に共通しているのは、1990年代以降、日本社会に特異なメカニズムが急速に解体されていくなかで、それによって支えられてきた「青年期から成人期への移行に関する巧妙な日本的システム」(耳塚 2001,p.103)も崩壊しつつあるという現状認識である。このような現状認識が「教育から仕事への移行」に関する研究の蓄積を促してきた。しかしそこで議論の対象とされてきたのは、従来であれば「巧妙な日本的システム」の恩恵をこうむることができたはずの青年たちが直面している「危機」に関するものであり、そのようなシステムの恩恵から最初から除外されていた(いる)青年について多くを語るものではない。その意味で、ニューカマー青年は従来の移行研究において、あらかじめ除外された存在であったといえる。

しかしながら、多くのニューカマー青年が日本社会で成長している現実、グローバル化が進行する現代日本社会において、もはや移行の問題を無視してニューカマーの教育課題について論じることはできないこと、また、国境を越えた移動やそうした越境移動を行なう人びとの存在を無視して青年の移行について論じるわけにはいかないことをわれわれに突きつけている。ニューカマー青年の移行に注目することは、ニューカマー研究においてそれぞれ単独に扱われてきた教育と労働の二領域を接合する試みであると同時に、移行研究が暗黙の前提としてきた国民国家的な枠組みを問い直す試みともなるだろう。

II. 分析の視点

以上のような問題意識に立ち、本稿ではニューカマー青年の移行経験に注目していくことになるが、その際の基本的な視点について述べておきたい。

青年の移行支援のキーワードとして第一にあげられるのが「自立」である。たとえば2003年6月には、文部科学、厚生労働など四大臣の連名で「若者自立・挑戦プラン」が出され、「若年者の働く意欲を喚起しつつ、全ての若年失業者等の増加傾向を転換させること」が目標に掲げられている。具体的に構想されているのは、「進路意識や目的意識が希薄なまま」青年期を迎える青年たちに対する適性判断やカウンセリング、職業理解の場を提供して就職へと方向づけるジョブカフェの設置や、小中学校時代からのキャリア教育などである。学校教育が、従来果たしてきた社会化や選抜・配分の機能の範囲を縮小した結果として、進路形成に困難を抱える層が増大しつつあるという社会状況に鑑みれば、学校外の移行支援が必要なことは疑いのないところであろう。

しかし、その必要性を認める一方で、「その政策がいかに理論的に正しく、社会の側からの必要性に支えられているとしても、それだけでその実効性を担保することはできない」(新谷 2005,p.111)と

する新谷周平の指摘は重要である。というのも、新谷が述べるとおり、「その政策や制度に関わるか否かの選択は、当の青年自身によって社会や政策・制度がどのように見えているかに大きく依存するからである」（新谷 2005,pp.111-12）。したがって、実効性のある政策や支援を構想しようと思えば、青年側の視点に立って、まずは「彼・彼女たちがどのような将来展望や自立モデルを持っているかを探」（新谷 2005,pp.120）る必要があるのである。

では、青年の移行支援をめぐる上記のような注目が、ニューカマー青年に対しても同様になされてきたかといえ、残念ながらそうはなっていない。文部科学省の「初等中等教育における外国人児童教育の充実のための検討会」が2008年6月に出した報告「外国人児童生徒教育の充実方策について」においても、課題は学校教育内の対応に限定されており、仕事や広くは社会生活へ向けた移行についての視点はないに等しい。

ニューカマーの受け入れをめぐる「自立」の視点をいち早く導入しているのは、むしろ経済界である。経済的側面から日本という国の今後のあり方に積極的に政策提言を行なう日本経済団体連合会は、2004年4月14日に「外国人受け入れ問題に関する提言」を發表し、そのなかで、「外国人の生活環境の整備」を進めていくに際して、「外国人に対する日本語教育を地域においてプログラム化する必要がある」と述べている。日本語の習得が何よりも強調されるのは、それが、外国人が「日本社会において自立と自己実現を図るための最初のハードル」と見なされているからである。

ニューカマーの権利や社会的安定に対して言語教育政策が必要なのはたしかであろうが、ここで掲げられる「自立」や「自己実現」が、誰のために語られているのかという根本的な問いかけは、ここでも忘れるわけにはいかない。これらの提言を検討しながら定松文が指摘するとおり、このような言語教育政策が、「過度な同化主義」や「新しいしかも巧妙な選別機能」を内在させながら、「移民個人の権利保障というよりも、『国力』という観点からの国の発展のための『人材育成』」（定松 2008,p.18）を期限付きで行なおうとするものではないのかという疑念を拭い去ることはできないからである。定松はこうした、いわば当事者不在の言語教育政策に対抗すべく、「移民を統合すべき対象として国家や自治体の側面からとらえるのではなく、社会を構成し、変容をうながす主体、期待や統制を裏切ることでできる主体として」（定松 2008,p.7）とらえることで開かれることばや社会の可能性を探ろうとしている。

今後、経済や社会の側からの要請に後押しされながら、ニューカマー青年に対する移行支援の必要性が認識され、その政策化が模索されることは十分にあり得る。新谷と定松が提示する上記の視点は、その際に、当事者不在のままに「自立」や「自己実現」が語られる矛盾した事態から距離をとり、当事者によって生きられた「自立」や「自己実現」をまずは理解したうえで、その実情に対応した政策や支援、さらにいえば社会を構想することの重要性を示唆するものである。

このような視点をふまえ、本稿では、在日ブラジル人青年を対象に行なった進路形成に関するインタビュー調査をもとに、教育と仕事の接続の仕方の多様な在り方や学びをめぐる「気づき」の多様な文脈を浮かび上がらせながら、「自立」や「自己実現」が、それを生きる当事者によってどのように意味を与えられ、生きられているかを理解したい。インタビューにおいては、「自立」や「自己実現」をめぐる経験は、実際にはかれらにとって重要な意味をもつ対象を獲得したり、喪失したりする経験として語られた。したがって、以下の事例分析においては、在日ブラジル人青年にとっての「自立」や「自己実現」を、獲得と喪失をめぐる語られる物語として描きだすことにする。

Ⅲ. 調査の対象と方法

本稿で用いるデータは、2004年10月から2006年12月にかけて、愛知県を中心として東海地方に暮らすブラジル人の若者29名（年齢は15歳～25歳、男性が20名で女性が9名）に対して実施したインタビュー調査の結果である。この調査は、在日ブラジル人青年の生き方を、来日の経緯、家族生活、学校生活、職業生活、余暇の過ごし方、将来展望など、多様な側面から理解することを目的としたもので、インタビューは通訳担当のブラジル人男性（日系3世）と共同で行なった。この男性は地域でのボランティア活動を通じて対象者の何人かとは調査を実施する前から面識があったため、まずはかれらにアプローチし、それをきっかけに友人や知人を紹介してもらいながら、機縁法的に対象者を増やしていった。

インタビューは、対象者の都合に応じて自宅、ファストフード店、ファミリーレストランなどで行なった。所要時間は1人あたり1時間半～2時間であったが、3時間以上に及ぶケースもあった。インタビューの進め方としては、上記の生活の諸側面に関する基本的な質問項目を準備したうえで、実際のインタビューにおいては質問の順番等にはとくにこだわらず、各項目についてできるだけ自由に語ってもらう半構造化面接の方法をとった。聴き取った内容は了承を得たうえですべてICレコーダーに録音し、後に文字起こした。

対象者は次の二つのタイプに大別される。一つは、母国では得られない何かを獲得するために、本人の意思により来日が選択されたタイプである。今回の調査では13事例がこのタイプに該当した。ほぼ全員が2000年以降の来日であり、初来日時における母国での最終学歴は相対的に高い。内訳は高校卒業4名、高校中退7名、中学校卒業1名、中学校未修了1名となっている。もう一つは、自らの意思によらずに来日を余儀なくされたタイプであり、今回の調査では16事例がこのタイプに該当した。2000年以降の来日は5名にすぎない。多くが1990年代半ば以降の来日であるが、1990年代初頭に来日した者も3名いる。初来日時における母国での最終学歴は相対的に低く、中学校未修了7名、小学校未修了6名、就学前3名となっている。義務教育修了前に親に連れられて来日していることがわかる。

二つのタイプの違いを際立たせているのは、前者にとっての日本での生活が獲得の経験として始まるのに対して、後者にとってのそれは喪失の経験として始まる傾向が強いということである。ただし、それらはいくまでも出発点において意味づけられた経験であり、実際には、獲得の経験として始まったはずが喪失の経験へと転じてしまうこともあれば、喪失の経験として始まったものが獲得に向けて軌道修正されることもあった。もちろん獲得の経験を順調に存続していくケースや、逆に喪失の経験を累積させていくケースもある。

実際のインタビュー・データの分析作業からは、四つの物語が析出された。そこで以下では、これら四つの物語のそれぞれに典型的と思われる4名を事例としてとりあげ、在日ブラジル人青年の獲得と喪失の物語を、来日後の生活を経るなかでの経験の変容過程にも目を配りながら描いていくことにしたい。4名についての調査時点でのプロフィールは表1の通りである。なお、人物名はすべて仮名である。

表1 事例として紹介する4名のプロフィール

名前	性別	年齢	来日歴	物語のタイプ	母国での学校経験	日本での学校経験	現在の職業	インタビュー時期
ロベス	男	19	2003年～現在	獲得の持続	高校中退 *高3途中	なし	工員 (自動車)	04.10.30
ミカエル	男	19	2002年～現在	喪失への転化	高校中退 *高1途中	ブラジル人学校高2で 中退	工員 (電器)	05.3.26
カロリネ	女	16	1995年 *以降9回程度 の転居と5 ～6回の帰国	喪失の累積	なし	小1～6, 中1より編入 →不登校繰り返し中3 夏に帰国, 3月再来日 し卒業	無職	06.12.25
エミリア	女	16	1990-1994年 1997-2002年 2003年～現在 *2004年7月 結婚	獲得への軌道 修正	小2～3 一時 帰国の際に 中学校卒業	小1, 小5～6, 中1～2, 2004年9月より専門学 校	無職	04.12.22

IV. 獲得と喪失をめぐる物語

1. 獲得の持続

まず取り上げるのは、来日が何よりも獲得の経験であり、来日後の生活を通じてその獲得の経験が持続する事例である。これに当てはまるのは何かしらの目的をもって自ら望んで来日するケースであり、来日後は比較的早い段階で就労生活に入っている。この場合、日本での就労は目的を達成するための手段として明確に位置づけられる。ほとんどは本国で高校卒業後もしくは高校を中退して来日しており、初来日時の年齢は相対的に高い。今回の調査でこのタイプに該当したのは11事例（男性10名、女性1名）であった。ここでは、2003年来日したロベス（19歳・日系3世）の事例を紹介する。

ロベスは、ブラジルでは高校3年生の途中まで通っていたが、「年齢を重ねていくとお金がかかる。[大学受験のための] 予備校に行くにもお金がかかる」という理由から、すでに日本で生活していた姉夫婦を頼って日本へやって来た。上記の語りからもわかるとおり、ロベスは大学進学を考えており、そのための「お金を稼ぐつもりで日本に来た」と明快に語る。大学では情報処理やマーケティングについて学び、卒業後は「プロフェッショナルとして誇りをもって生活できる立派な仕事」に就きたいと考えている。両親はブラジルで農業を営んでおり、ロベスが「自分の家族は低所得の家族だと思っている」と語っているように、家計はけっして裕福ではなく、ロベスを含めた6人きょうだいのうち、大学進学を果たした者は一人もいないという。父親から「きょうだいの誰も大学に行っていないのに、ロベスだけに大学に行くお金を出すわけにはいかない。不公平が出るから」と言われたことが、日本への出稼ぎを決意させた。

言葉も習慣も異なる異国で初めて両親と離れて暮らす生活は、「想像を絶する経験」の連続だったという。何よりも驚いたのは仕事のきつさであったが、それは来日前に抱いていた仕事のイメージが、現実とまったく異なっていたからであった。

日本に来る前は、日本は最先端とっていました。仕事も全部機械がやってくれて、とても楽にできると思っていました。今みたいに、こんなに働くことになるとは思ってもみなかった。

また、日本人から向けられる偏見のまなざしも、来日して初めて直面した現実であった。「ガイジンというだけで、同じミスをして『ガイジンだから』と言われる。日本人がミスをしてあまり言われないのに」と職場での差別的な扱いについて語る一方で、日常生活においても監視のまなざしにさらされることの不快感を次のように語っている。

生活全体で困ることは、ショッピング・センターに行ったときに、日本人と同じように「いらっしゃいませ」と言わないことです。監視の目で見られる。盗みにいくわけではないにもかかわらずそのような目で見られて、すごく不愉快な気持ちになります。(中略) ブラジルに来た日本人をブラジル人は歓迎するのに。ぼくのお父さんも、どういう人でも歓迎していました。

このような経験をしながらも、ロベスは「日本に来たことをまったく後悔していない」という。というのも、「日本で得られる収入はかけがえのないもの」と感じているからだ。

ブラジルにいたとしたら、けっして手に入っていないものを手に入れることができました。(中略) ブラジルにいたら、どうやったら勉強できるか、どうやって車を手に入れたらいいんだろうと、今でも思っていたはずです。

このような語りからは、大学進学資金の獲得のための出稼ぎという来日当初からの目的が、ぶれることなく維持されている様子が見てとれる。それを裏付けるかのように、来日してから現在にいたるまで、残業の機会を求めて職場を移りながら、現在は三つ目の工場自動車部品の組み立ての仕事をしている。

また、その過程でロベスが獲得しえたと感じている対象は金銭だけではない。出稼ぎ労働を通じて社会経験を重ねることによる自らの成長もその対象に含まれる。ロベスは、日本に来てからの自らの変化に関する問いに対して、「完全に変わりました。とくにお金の出所に関して、今まで気にしたことはありませんでしたが、日本に来て働くことで、どれだけ働けばどれだけのお金が手に入るか、お金の価値がわかりました。日本で、どれだけ苦勞して手にするものなのかがわかりました」と、金銭感覚の獲得について語っている。また、「家族のありがたみがわかりました。全部のことが、自分一人ではないということがわかりました」と、家族の価値を再認識したとも語っている。そして、以上のような経験を通じて獲得されているのは、自身が「自分でも驚くぐらい大人になったと思います」と語るところの成長の自覚である。

これに似た語りは、じつは今回の調査において多くの青年が口にしたものでもあった。つまり、来日前後の自らの変化が、「大人になった」「成長した」「責任感を自覚するようになった」ということばで表現されており、ほとんどの場合、それは仕事と関連づけて語られているのである。逆に言えば、このような成長の自覚が、けっして楽ではない工場労働への従事を支えているといえるだろう。

10代後半から20代前半のかれらの多くにとって、日本への出稼ぎがほとんどはじめてまともに働

く経験になることを考えると、その経験が、いわゆる「社会を知る」という意味で「自己の成長」ないし「自立」の物語の主要な構成要素となっても不思議ではない。これは、青年期にある在日ブラジル人の移行経験を考える際に無視できない視点である。ダニエラ・デ・カルヴァリョは「疎外感と社会的地位の喪失から生じる被差別感についての分析を過小評価してはならない」としたうえで、「社会的地位の喪失感は、多くの場合、移民者が自国では稼ぐことのできない多額の収入を得るために出身国では就かない低熟練労働を経験することから生じる」と述べている（カルヴァリョ 2003, pp.370-371）。この指摘は、すでに成人期の一定の期間をブラジル本国で過ごした後に来日した世代には当てはまるかもしれないが、世代を超えて普遍化できるものではないだろう。日本での就労が人生においてほとんどはじめての就労経験となる青年期のブラジル人にとっては、たとえそれが「低熟練労働」であったとしても、それが社会的地位の喪失としてではなく、むしろ新たな社会的地位の獲得として肯定的に受けとめられる傾向があることを認識しておくことも重要である。

2. 喪失への転化

来日前に抱いていた獲得のイメージと現実に獲得できるものとの間に齟齬が生じたり、来日後に環境条件が変化したりすることにより、獲得の経験が喪失の経験へと転化する場合がある。今回の調査で該当したのは2事例（男性1名、女性1名）と少なかったが、こうした転化の可能性はつねに存在している。ここでは、サッカーのクラブ・チームへの入団を目的に来日したミカエル（19歳・日系3世）の事例を紹介する。

ミカエルは2002年5月、16歳の時に単身で日本へやって来た。現在は親戚（おじ、おば、その娘）が住む公団住宅と一緒に住まわせてもらっている。両親と他の3人の兄弟はブラジルで生活している。来日の目的は、日本でサッカーのクラブ・チームに入団することであった。ブラジルの地元（アマゾナス州マナウス）では大きなクラブがなかったことや、サンパウロなど大都市のサッカー・クラブの選抜の厳しさなどから、日本でJリーグのチームに入団することを目指して日本へやって来た。入団テスト等の手配は、すでに来日していたおばにしてもらったという。

来日時にはブラジルで高1に在学中であったが、「プロのサッカー選手になりたいという気持ちの方が勝っていた」と、母親から「まあ、それがあなたの気持ちだったら、がんばればいいんじゃない」という励ましを受けたことで、高校を中退しての来日を決意した。来日してすぐにブラジル人学校⁽¹⁾に高2で入ってはいるが、それは入団テストを受けるために在学証明が必要だったからであった。

そして、来日して1ヶ月半後に、あるクラブ・チームの入団テストを受けた。本人としては手応えを感じることができたのだが、ずいぶん待たされたあげくに手にした通知は、不合格を知らせるものであった。それはミカエルに「ショックというか、複雑な気持ち」をもたらし、希望や自信を喪失させるものであった。来日の目的であったサッカーのクラブ・チーム入団への道を閉ざされたことで、ブラジル人学校に在籍している意味もミカエルには感じられなくなっていき、中退の道を選ぶ。

来日当初の目的が宙に浮いてしまった結果、確固たる滞日理由を失ったミカエルの胸中を占めるようになったのは、支援してくれている親や親戚に対する引け目の感情であった。そして、そうした引け目の感情が、ミカエルを就労へと導いていくことになる。

ぼくは、やっぱり父親に頼りたくなかったし、ましてや一緒に住んでいるおじには頼りたくな

かったので、希望を失うと同時に、なんとか生活していかなきゃって。で、結局ズルズルと時間だけが経ってしまいました。

そして現在は、派遣会社を通じて探した金属プレス加工工場で毎日8時から20時まで働き、ひと月あたり平均26万円の収入を得る生活を続けて1年以上になる。明確な目的をもって始めた就労ではなかったが、就労による金銭の獲得およびそのことによって可能になる消費生活の享受は、きわめて限られた条件下のものであれば、「自由」や「自立」といった感覚をもたらし、親や親戚に依存していることに対して抱いていた引け目の感情を相殺してくれる。また、そのような「自由」や「自立」を感じられる日本は、ミカエルにとって「居心地がよい」場所ともなっていく。

このようなかたちで日本生活への「慣れ」が進行するのと反比例するようにして、学びへの意欲は減退していった。ミカエルは、ブラジル人学校を高2の途中でやめてしまった後も、途切れてしまった学歴を自力で埋め合わせるべく、スプレチーボと呼ばれるブラジル政府後援の初等・中等に関する資格認定試験を受けて、高校の卒業資格を取得したいと考えていた。しかしながら、労働が消費生活の享受へと直結する生活を送るうちに、資格取得への思いが次第に薄れていったと語っている。

自分のなかではスプレチーボをやるつもりだったんですが、仕事を始めて、それが次第に日常化してしまって、とりあえず試験を受ける機会があったらそれでいいやと思って、最初の熱意というのはなくなっていったんですね。とりあえず仕事をして、まあ、機会があれば〔試験へのチャレンジを〕やろうかなあと。

以上の語りからは、ミカエルにとって、すでに滞日そのものが目的になりつつあることが見てとれる。チャンスを獲得するための来日が、不本意にも喪失の経験に転じてしまった後に、その喪失を埋め合わせてくれたのが労働による消費生活の享受であった。しかしそれは、現在の享乐的な生活への埋没によって現状の不安定さから目をそらすことで、将来のさらなる不安定へと自らを追い込んでしまうことはあっても、そうした事態の回避につながる新たな獲得へと結びつくことはむずかしい。滞日予定期間に関して質問するたびに異なる回答（「あと1年ぐらいいは」「この先4、5年は」）をするミカエルに、具体的な将来像が描けているとは考えにくい。

3. 喪失の累積

義務教育段階で来日する子どもたちのほとんどは、本人の意思とは無関係に親に連れられてきている。母国の学校や友人から不本意にも切り離されることで、来日は何よりも喪失として経験される。日本での生活が喪失の経験として始まった場合、その後の生活のなかで喪失が累積していくケースが多い。今回の調査でこれに該当するのは10事例（男性5名、女性5名）であった。

地理的移動が初回の国家間移動にとどまらず、国内での地域間移動や帰国／再来日という初来日後の国家間移動が複雑に絡みあうかたちで展開する場合、喪失の経験はいっそう深刻さを増す。また、喪失が累積していく過程で、労働と消費の経験がもたらす擬似的な獲得感が、学校からの離脱を促進し、喪失の累積に拍車をかける点も見逃すわけにはいかない。以下では、このようなケースの典型としてカロリネ（16歳・日系4世）の事例を紹介する。

カロリネは、5歳の時に初来日して以降、帰国／再来日を5、6回、日本国内での転居を9回も経

験している。来日して以降は日本の学校に通いつけているが、転居はしばしば転校をとまなう。頻繁な転校およびそれによって学校から遠ざかっていった経緯を、カロリネは次のように語っている。

【引っ越しをするたびに学校を転校した感じ?】はい。それで学校嫌いになりました。幼稚園のときはまだよかったんですけど、小学校の5年生のときから2年に1回は引っ越しするんですよ。慣れた、慣れているときに引っ越しをするんですよ。【それでも、引っ越しをするたびに学校には入っていたの?】入っていたんですけど、あまり学校には行かなかった。

短期間のうちに繰り返される転校は、学習の積み重ねを困難にするだけでなく、言語や文化の違いゆえにただでさえ時間のかかる教師や他生徒との関係づくりへの意欲を減退させることも多い。結果として、学業も教師や生徒との関係づくりもあきらめ、学校そのものから離脱するということになりがちなのである。

学校をすぐに引っ越しをするから、友達をつくっても意味ないんですよ。あまり近づこうとしなかったんですけど、あっちも同じ意見だったと思うから、近づいてこなかったし。友達は全然いなかった。

つまりカロリネは、転校により生じるさらなる喪失の経験を予見し、そうした事態をあらかじめ回避すべく〈いま-ここ〉における関係構築の努力そのものを断念しているのである。

自らの存在意義を希薄に感じる経験は、帰国した先のブラジルでも同様であった。13歳のときに帰国したカロリネは、親戚の家を転々として過ごすが、それはけっして居心地のよい経験ではなかったという。

私、親戚のお家にいたんですよ。人の家に住むのってすごく嫌なんですよ。すごく気を使わなきゃいけないし、その家のルールがあって口出しをしちゃあかんからって言って、しょうがないから日本へ帰るかって。日本へ帰って仕事をしようかって思った。

学校にも母国にも自分の居場所を感じられないカロリネが、実際に就労の世界に入ってしまったのは中3の頃だった。「すごく学校に行くのが嫌で、仕事を始めた」という言葉どおり、まさしく学校からの脱出としての就労である。そしてその背後には、「仕事か勉強かをやれ」と迫り、勉強をしないなら「早く仕事を見つけに行ってください」と就労をうながす親の存在がある。

結局、父親が契約していた派遣会社の紹介で、コピー機部品加工の工場で働き、月額16万円を稼いだ。それだけの金額の用途について、彼女は次のように語っている。

5万円を家に、親にあげて、携帯で、それで、いろんな、MDとか、カメラとかいろんなものを買ったんですよ。それで余ったお金を銀行にあげて。服とか鞆とか靴とか買っていた。すごい買っていた。(中略)週末、外で食べたり、妹に服を買ってあげたり、お小遣いをあげたり、すごいお金を使った。【週末といえば教会があるじゃない。】ありました。教会は家の近くだったんで

すよ。帰りにいろんなところに寄って、買いたいものを全部買った、あの頃は。(中略)ほんとお金をいっぱい使いきりましたね。

このように、学校で何かを獲得することに価値を見いだせなくなったカロリネをとらえたのは、消費の魅力であった。学校生活において喪失やあきらめの経験ばかりが多く、自己の存在意義を見出せずにいる者にとって、商品を購入できる消費者であることは、数少ない存在証明の手段となる。カロリネの中学生の頃からの就労とそれによって可能となった節度なき消費行動は、彼女なりの必死の存在証明と理解することが可能である。

では、学校が嫌で早々に就労の世界に入り、享乐的な消費生活を堪能したはずのカロリネは、それなりに納得のいく将来展望をもちえているのだろうか。現実はその逆であり、労働と消費を繰り返す生活に次第に虚しさを感じるようになっていったという。

今は仕事をしてお金はもらえるけど、お金をもらってもすぐになくなるじゃん。どんなに仕事をしても意味がないという感じ。それが、結構ストレス。それで、いくらがんばっても、すぐなくなっちゃうんだよね。意味ないっていう感じ、と思うわ。ただそれだけ。

また、労働の経験そのものを通して、早期就労を最適な脱出口として選んだ自らの判断に疑問をもつようになった。カロリネは、「仕事をするようになった時と、仕事をする前とでは、考え方は変わったよ」と前置きした上で、次のように語っている。

例えばさ、私は仕事をしている時は、ずっと立ちっぱなしで仕事をしていたんだよね、このまま。「ちゃんと勉強すればよかったな」とか「もっと中学校でいい思い出を作ればよかったな」ってすごい思っていたよ。

ここに浮上するのは、学校からの脱出の試みが、逆に、学校こそが自らの将来を切り開く唯一の脱出口であったことを気づかせるという皮肉な現実である。

4. 獲得への軌道修正

喪失の経験として始まった来日生活には喪失を累積させていく契機がいくつも潜んでいる。一度その悪循環に陥ってしまうと、そこから抜けだすのは容易なことではない。しかし何かしらの環境や条件が備わった場合、喪失の経験の累積を回避し、新たな獲得に向けて自らの生を軌道修正することが可能になる。今回の調査では6事例(男性4名、女性2名)がこのようなケースに該当した。

ここで重要になるのは、そのような軌道修正を可能にする環境や条件はどのようなものかということである。以下では、繰り返される地理的移動により学校からの離脱を余儀なくされる局面に何度も立たされながらも、喪失の累積という悪循環に陥ることなく「学び直し」による軌道修正を試みるエミリア(16歳・日系3世)の事例を紹介しながら、そのような軌道修正を可能にする諸条件について検討してみたい。

エミリアが最初に日本へ来たのは1990年、2歳の時であった。それから現在まで2度の帰国を経験しているが、日本での生活は延べ12年間に及ぶ。エミリアの学校生活は、小学校低学年から母国と日本の行き来により編入を繰り返すものだった。日本で小学1年生を終えたところでブラジルへ

帰国し、2、3年生をブラジルで終えた後で再び日本に戻り、以前通った小学校とは別の小学校に5年生から編入し卒業した。4年生を飛ばして編入したことになる。その後中学校に進学するが、小学校でも中学校でも、日本語ができるから国際教室に行く必要はないとされたため、「勉強しなかった。行きたかった」にもかかわらず、十分な学習支援は受けられなかったという。

このように、帰国と再来日及び国内での転居と転校を繰り返す、学校でも学習意欲を十分に満たすことのできなかつたエミリアは、自身も「すごい不良だった」と振り返るとおり、反学校的な中学校生活を送ることになる。頼りになる教師もいる一方で「外国人を嫌っていた人も多かった」という学校での生活は、欠席や教師への反抗の繰り返しだった。彼女の場合、親との折り合いも悪く、家庭においても疎外感を感じながら暮らさざるをえなかった。そのような状況下、同じ団地にたむろする年齢の近い同胞集団に接近していく。その集団は、バイク・自動車の窃盗やドラッグの扱いなども行なう「〇〇（団地の名前）での一番悪いグループだった」という（ただし、彼女自身はそうした犯罪行為からは距離を置いていたということである）。そのような集団に身をおくことで「強かった気もしてた」と、エミリアは自己が拡大していく感覚の実感を語っている。

しかし、その集団の一員でいることが彼女にとって重要だったのは、「楽しかった」「気にしてくれる人がいた」という言葉で表される通り、何よりもそこが自分の存在意義を確かめることのできる場所だったからである。このような逸脱文化を形成する準拠集団への所属は、学校から排除の結果として希求されるものであると同時に、学校からの離脱を促進する要因でもある。実際、同様の経路を経た多くの子どもたちが義務教育修了を待たずに学校からの離脱を余儀なくされている。

ところがエミリアの場合は、そのようになし崩し的に学校から離脱していくということはなかった。これには、エミリアが上記の逸脱的な同胞集団とは異なる「もう一つの居場所」を確保していたことが大きく関わっている。その居場所とは、エミリアが住んでいた団地内の集会所を利用してNPOが行っていた、公立小中学校に通うニューカマー児童生徒（国籍は主にブラジルとペルー）を対象とした放課後学習支援教室（以下Y教室）であった。

じつはエミリアは、父親の強い勧めにより、ブラジル人学校が開設する放課後2時間の母語補習コースに小5から通っていた。本人はそれほど積極的だったわけではないのだが、「[小学校]5、6年のときは『まじめちゃん』だったから、最初は『まあ、いい』と思って」通っていたと振り返る。しかしそこは、親しい友人がいるわけでもないし、先生から十分な指導を受けられる環境でもなく、「嫌だった」という。

そのような満たされぬ気持ちの受け皿となってくれたのがY教室であった。中学校に通い始めると、親には内緒で母語補習コースをさぼってY教室に通うようになる。Y教室には、中学校に通った日の放課後だけでなく、中学校を欠席した日にも顔をのぞかせていたという。Y教室に通いはじめたきっかけは「みんなが遊びにいくところだったから」であるが、通い続けることになったのは、何よりも心を許せる仲間と「Iさん」がいたからであった。「Iさん」とは、Y教室を立ち上げ、現在も代表を務める日本人女性のことである。このI氏の存在および彼女との関係を通して築いた能力や価値観が、その後のエミリアを支える核となっていく。

Y教室に顔を見せるようになったエミリアは、日本語とポルトガル語の両方を理解できる能力を買われて、I氏から来日間もない大人への日本語指導の手伝いをしないかと誘われる。そのときの経験を振り返ってエミリアは、「人に教えるのが楽しかった。気持ちよかった」と語っている。エミリアにとってY教室は、中学校でもブラジル人学校でも得られなかった他者からの承認を得られる数少ない場所の一つだったと言えるだろう。

I氏はエミリアの話に誰よりも耳を傾けてくれる存在であった。「何をしたいの?」と大人から聞かれることは、エミリアにとって新鮮な出来事であり、自己肯定感を取り戻すきっかけとなった。

「何をやりたいの?」って聞くと、すごい、その聞かれている人が、喜ぶと思う。そう聞かれたことあまりないから。じゃあ、自分の希望なんてどうでもいいんだって思った。

このように、エミリアにとって学校からの排除が即、学校からの離脱につながらなかったのは、彼女が、逸脱的な同胞集団に属すると同時に、Y教室をも自らの居場所として確保し得た幸運によるところが大きい。とりわけI氏との出会いは、彼女のその後の身の処し方にも大きな影響を与える出来事であった。高校進学に対する前向きな姿勢も、I氏との関係のなかで育まれていく。I氏から「高校は行かないの?」と尋ねられたエミリアは、「私、高校へ絶対行く。Iさんのために行く」と答えていたという。

しかしながら、一度は決意した高校進学も、中2が終わる頃に親に帰国を強いられることによって、断念を余儀なくされてしまう(ただし、ブラジルに帰国していた1年間のうちに現地の公立中学校に通い、そこで中学校の卒業資格は得たという)。そして再び来日して以降、1年半ほどは、父親の友人を通じて探した自動車部品加工の工場で働くことになる。自動車部品の検査の仕事(月収15万円)を1年弱、その仕事が「きつかったから」移ったという次の工場ではシートベルトの生産ラインに立ち(月収18-25万円)、7ヶ月ほど働いた。

その間に、中学生の頃に団地内で知り合ったという7歳年上の男性(現在23歳)と結婚もしている。16歳という早い年齢での結婚に対して、両親からはとくに反対もなく、「早いけど、自分がそれ、望んでるなら勝手にしなさい。とめても意味ないから」というような反応だったとのことである。そもそも「お父さんとお母さんと一緒にいるのが嫌」だったエミリアは、結婚して別居することにより、両親に頼らず、また、自分にも親にも嘘をつくことなく、「自分らしく」生活できるようになったことの喜びを語っている。

しかし結婚は、エミリアに両親からの解放の喜びをもたらしただけではなかった。それは、エミリアの経験に夫の経験が重なり合わさり、二人の将来を思い描くことで、移動によって断念を余儀なくされた学びへの意欲を再び取り戻す契機となる出来事でもあったのである。

現在は中古車売買の会社で働いている夫は、愛知県内に所在する大手自動車メーカー直営の自動車整備専門学校内に開設された、在日ブラジル人がポルトガル語で学べる自動車整備工養成コース(以下、T校)⁽²⁾に通い、卒業している。そのことがエミリアを、一度は不本意なかたちで閉ざされてしまった学びへと再び駆り立てることになった。「ブラジルへ帰ったら〔夫と〕一緒に就職できるし、頼りになれるし」と将来の展望を語りながら、〈いま-ここ〉での切実な心情をエミリアは次のように表現している。

私が一番思ったのは、もっと、もっと自分が知ることができるようから。自分が知っていることをもっと多く増やせるから。(中略)ブラジルでは、そういうチャンスがないから。このチャンスを逃したら、これで終わりだって自分で思って。日本にいて、あの、なんていう……勉強していなかったわけじゃないですか。だから、もう勉強していないんだったら、ブラジルに帰っても、また終わったところから始めないといけないじゃないですか。だから、それをやる前に、どうせここにいるんだから、ねえ、そのチャンスが見えたんだから、そのチャンスは握るって感じ。それ

でブラジルへ帰ったら、また終わったところからはじめる。

エミリアにとって、T校に通うことは、帰国後の就職への備えとして安心感を手に入れることであると同時に、知識獲得そのものへの欲求の充足および学歴の空白に対する焦燥感の鎮静化という意味でも、またとない機会であった。最初はエミリアの入学希望に半信半疑だった夫や父親も、彼女の「自分でやる！それやりたい！」という強い意思表示を前にして納得せざるを得ず、納得して以降は学費援助をはじめとして快く協力してくれたという。

学校に通い始めてからは、学習習慣を欠くがゆえの困難を自覚しながらも、よいスタッフや仲間にも恵まれ、成績向上のために努力している（「点数がすごく低い。それでも、点数を上げたいと思っている。それを頑張ってる」）。そして、T校で1年のコースを修了した後は、日本で再び仕事をしてブラジルに家を購入し、「最低2年で帰りたい」という。整備士資格をもって帰国した後は、ブラジルでの高校卒業資格の取得、そしてできれば大学に進学することを希望している。

エミリアには、学びから離脱してしまいそうな契機がいくつも存在していた。しかし、同様の経路をたどって学びから離脱していく多くの子どもたちと違っていたのは、離脱しそうになるたびに、それを押しとどめるような力が働いたことである（それを「社会関係資本」と呼ぶこともできるだろう）。エミリアが現在まで学びへの意欲を持続し続けることができていること背景として、彼女が偶然に利用し得た諸資源の存在を考えないわけにはいかない。Y教室におけるI氏との交流、T校に通い卒業した夫との結婚、T校のスタッフや生徒、T校の存在そのものなど、多様な資源に接しえたことが彼女の学びへの意欲を支えてきたのは間違いないところだからである。だが、このことは一方で、そのような偶然の恩恵をこうむることのない多くの青年の存在を暗示していることも忘れてはなるまい。

V. 結語

本稿では、国境を越えた移動がニューカマー青年の移行のありようにどのような影響を与えるかについて、在日ブラジル人青年の経験をもとに分析してきた。とりわけ、かれら自身が「自立」や「自己実現」をどのようなものとして生きているかを、移動による獲得と喪失の経験としてとらえることで、四つの物語が析出された。

来日が獲得の経験として始まるタイプにおいては、来日前に目標とした獲得の内実と来日後に実際に獲得するものとの間に大きな齟齬が見られない場合、獲得感を持続させながら日本での生活を送っていくことが比較的可能である（獲得の持続）。ところが、両者の間に大きな齟齬が生じ、来日前の目標が無に帰してしまうような場合、当初の獲得の経験は、喪失の経験へと転化してしまうことになる（喪失への転化）。他方、来日が喪失の経験として始まるタイプでは、来日時の喪失は、来日後の頻繁な地理的移動とも相まって、さらなる喪失を招来しやすい。つまり喪失の経験は悪循環的に累積しやすいのである。喪失の累積過程を生きることを余儀なくされた若者にとって、労働と消費の行為が一時的な獲得感をもたらすことがあるが、その獲得感将来を切り開くための投資へと結びつくことは少なく、あくまでも擬似的なものにとどまりがちである（喪失の累積）。しかし、何かしらの環境や条件が備わった場合、そのような累積の悪循環に陥ることからの回避が可能になる場合もある。IV.4.で紹介したエミリアの事例では、地域の学習支援教室とそこでの信頼できる大人との出会いが、学校から離脱してしまいそうな彼女を引きとめ、学びへの意欲を支えてきた。そして、ポルトガル語で学んで自動車整備士資格を取得できる学校とそこを卒業した夫との出会い

が、将来の機会拡大を目指した学び直しへの軌道修正を可能にしている（獲得への軌道修正）。

さて、以上の分析から浮かび上がるのは、国境を越えて移動するニューカマー青年の移行を、獲得ないし喪失の経験の持続・転化・累積・軌道修正といったダイナミズムのなかで生きられるものとして理解することの重要性である。これは、ニューカマー青年の移行支援を構想するうえで不可欠の視点といえる。

それは第一に、ニューカマー青年の移行支援に携わろうとする者がニューカマー青年のニーズとして想定する喪失や獲得の対象が、当事者によって生きられた、もしくは生きられている喪失や獲得の経験を理解したうえでのものでないかぎり、それがいかに支援者個人の善意や社会の側の必要に支えられたものであったとしても、十分な実効性をもつことはむずかしいと考えられるからである。

第二に、このことは、ニューカマー青年がまさしく青年期を生きていることと関連している。すなわち、ニューカマー青年の移行支援は、かれらが「人間形成の途上にある可塑的な存在」（酒井編 2007,p.80）であることを前提に構想されなければならないのである。エミリアの事例で見たとおり、彼女が主体的に自らの将来を築いていく構えを獲得できたのは、それを可能にしてくれるような諸資源に彼女が運よくめぐりあえたからであり、獲得にいたるまでにはさまざまなゆらぎを経験している。そして、このゆらぎには、国境を越えた移動の経験も大きく影響している。こうした経験のありようを解明する努力を続けながら、ゆらぎながら生き方を模索する存在としてニューカマー青年を理解し、どのような局面でどのような働きかけが望ましいかを考えていく必要があるだろう。

以上をふまえたうえでの今後の課題は、国境を越えた移動のなかで移行を生きる当事者にとって「自立」や「自己実現」はどのように経験されているのか、移動にともなう獲得や喪失の経験およびそれが持続したり変容したりする多様なコンテクストを、エスニシティやジェンダーの違いなどにも十分に目を配りながら理解することである。また、日本から帰国した青年の帰国先での進路形成についても、追跡的な調査を行なう必要があるだろう。そして、それらをふまえた実効性のある支援の在り方や柔軟な教育システムおよび教育と社会との接続の在り方を構想していくことが求められる。

<注>

(1) 1995年頃から東海地方や北関東の各県に設立されたブラジル人学校は、1998年頃から急速に増え始めた。2006年時点では90数校が確認されており（月刊『イオ』編集部編 2006）、そのうち49校がブラジル教育省の認可を獲得している（小内 2008,p.40）。これらの認可校においては、さしあたり帰国後の教育との連続性が確保されているといえる。ただし、2008年秋来の不況の影響で、閉鎖に追い込まれる学校が相次いでいるとの報告もある。日本ブラジル人学校教会（AEBJ）の調査によれば、2008年10月からの1年間で、各地に99校あったブラジル人学校のうち16校が経営難などで閉鎖され、さらに6校と連絡が取れなくなっているという（『朝日新聞』2009年12月20日付）。

(2) T校は、1999年に大手自動車メーカーが在日ブラジル人青年を対象に開設した1年制の自動車整備工養成コースであり、すでに100人を超える生徒が卒業している。このコースではポルトガル語による指導がなされ、ブラジルの自動車事情に即した教育プログラムが実践されており、修了すると日本の3級整備士資格と同等以上の技術を修得できるとされている。コース終了後は帰国してブラジルの自動車関連産業に就職し活躍することが期待されており、就職先（自動車販売店など）の斡旋も行なわれている。

<引用・参考文献>

- 新谷周平 2005,「青年の視点から見た社会・制度—選択の解釈と支援の構想—」『教育社会学研究』第76集, pp.111-126.
- カルヴァリヨ, ダニエラ・デ 2003,「日本の日系人コミュニティ」岩崎信彦他編『海外における日本人, 日本のなかの外国人—グローバルな移民流動とエスノスケープ—』昭和堂,pp.366-84.
- 月刊『イオ』編集部編 2006,『日本の中の外国人学校』明石書店.
- 広崎純子 2007,「進路多様校における中国系ニューカマー生徒の進路意識と進路選択—支援活動の取り組みを通じての変容過程—」『教育社会学研究』第80集,pp.227-245.
- 本田由紀 2005,『若者と仕事—「学校経由の就職」を超えて—』東京大学出版会.
- 児島明 2006,『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィ—』勁草書房.
- 小杉礼子 2003,『フリーターという生き方』勁草書房.
- 耳塚寛明 2001,「高卒無業者層の漸増」矢島正見・耳塚寛明編『変わる若者と職業世界—トランジションの社会学—』学文社,pp.89-104.
- 宮島喬・太田晴雄編 2005,『外国人の子どもと日本の教育—不就学問題と多文化共生の課題—』東京大学出版会.
- 宮本みち子 2002,『若者が《社会的弱者》に転落する』洋泉社.
- 森田京子 2007,『子どもたちのアイデンティティ—ポリテックス—ブラジル人のいる小学校のエスノグラフィ—』新曜社.
- 小内透編 2003,『在日ブラジル人の教育と保育—群馬県太田・大泉地区を事例として—』明石書店.
- 小内透 2008,「外国人の子どもと教育問題—過去・現在・未来—」『ジュリスト』No.1350,pp.38-44.
- 太田晴雄 2000,『ニューカマーの子どもと日本の学校』国際書院.
- 定松文 2009,「移民と言語—人は移動するという前提から言語と社会をとらえる—」『ことばと社会』11号, pp.6-25.
- 酒井朗編 2007,『進学支援の教育臨床社会学—商業高校におけるアクションリサーチ—』勁草書房.
- 佐久間孝正 2006,『外国人の子どもと不就学—異文化に開かれた教育とは—』勁草書房.
- 志水宏吉編 2008,『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校に見る教育支援—』明石書店.
- 志水宏吉・清水陸美編 2001,『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって—』明石書店.
- 清水陸美 2006,『ニューカマーの子どもたち—学校と家族の間の日常世界—』勁草書房.
- 太郎丸博編 2006,『フリーターとニートの社会学』世界思想社.
- 山田昌弘 2004,『希望格差社会—「負け組」の絶望感が日本を引き裂く—』筑摩書房.
- 山崎香織 2005,「新来外国人生徒と進路指導—『加熱』と『冷却』の機能に注目して—」『異文化間教育』第21号,pp.5-18.

(2010年1月21日受付, 2010年1月29日受理)